第3種郵便物認可

生活

✉seikatsunews@asahi.com

滋賀・東近江 永源寺地域の取り組み

最期まで家で チームが支える

琵琶湖の東に広がる滋賀県東近江市の永源寺地域では、高齢者の半数近くが自宅で最期を迎える。在宅看取りの文化を地域にもたらしたのは、18年前に赴任した永源寺診療所長の医師、花戸貴司さん(47)だ。これまでの取り組みや患者との日々を、1月に出版した本につづっている。

豊かな自然に集落が点在する永源寺地域。高齢化が進み、住民5300人余りの、3人に1人が65歳以上だ。

「家にいられるのはみんなのおかげや」。何度も繰り返す一人暮らしの端野マツエさん(82)。9年ほど前に認知症と診断されたが、愛犬テツとの暮らしを続けてきた。

お金の管理はもちろん、食事の用意、入浴、掃除もできない。それでも「家にいたい」というマツエさんの願いをかなえたいと、花戸さんがまとめ役となってケアチームを結成。食事や洗濯はヘルパー▽公共料金の支払いは社会福祉協議会▽見守りは近所の人々――と、それぞれが支える。離れて住む、おい夫婦を含め、体調のわずかな変化もチームで共有する。

笑顔の毎日を送っていたマツエさんだが、昨夏、テツが18歳で死んだ。「なんで動かへんのか」。マツエさんは二間だけの自宅で、ベッドに横たわるテツをいつまでも揺すっていたという。いち早く気付いた近所の主婦(60)がケアマネジャーに連絡。テツの死はその日のうちにチーム全員に伝わった。

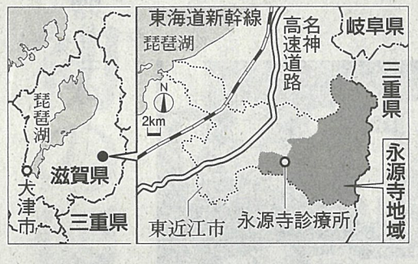
環境の変化は認知症の悪化につながる。「テツを探しに」と、一人で出かけるかもしれない。そんな懸念が共有され、チームで体調や服薬、食事量の確認が念入りに進められた。ヘルパーも薬剤師も、マツエさんと顔を合わせる度にテツの死を伝えた。

《テツは死にました。18歳まで長生きをしてがんばりました》。マツエさんの居間には、おいが昨夏に書いた1枚の紙が、今も貼ってある。

「もうテツはおらんでな。賢い犬やった」。1月の花戸さんの訪問診療時、マツエさんは、そんな思い出話をした。

「テツの分をみなさんが補ってくれている。認知症の進行は見られません」と花戸さん。最期をどこで迎えたいかと聞く花戸さんに、マツエさんは「ずっと家におるのがええ」と笑顔で答えた。

月2回の花戸医師の訪問診療で、笑顔をみせる端野マツエさん＝滋賀県東近江市



医師・ヘルパー・ご近所 わずかな変化も共有

「在宅医療は地域づくり」実感

終末期をどう過ごしたいか。花戸さんは患者が元気なうちから折に触れて尋ねる。

「病院に行きたくない」「妻と最期まで」。電子カルテには患者が深く考え、口にした言葉が残る。花戸さん自身が在宅を勧めることはない。

地域医療を志し、滋賀県内の中核病院から2000年、永源寺地域に赴任。最先端の医療で、1秒でも延命することが医師の使命と疑わなかった。転機は初めて在宅で看取った男性。最期のときを迎えていると分かっているのに、必死で点滴を準備していた自分に家族の声が聞こえてきた。「先生、もうあかんな」

男性も家族も、死を自然なものと受け止めていたのに、自分だけが患者ではなく病気を見ていたのだと気付いた。点滴をやめた数日後。男性は穏やかな表情で逝った。

地域医療で医師は何ができるか。自問した結論は「1人では何もできない」。介護の専門家や行政、薬剤師、お寺や交番の警察官、消防士らも含め、地域の人みんなが協力するチームをつくり、自分は一員に徹する。そんな「チーム永源寺」をめざした。

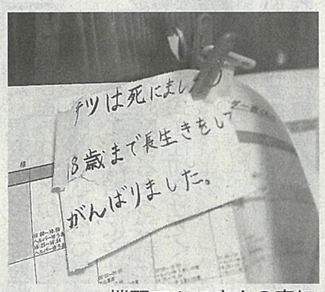
在宅患者が増え始めたのは赴任から5年ほど後。今は約80人を診る。全国的に見れば、死亡者の8割近くが医療機関で亡くなるなか、昨年1年、永源寺地域で亡くなった73人のうち、花戸さんは30人を在宅で看取った。「チームで支え合う安心感が地域に生まれつつある。在宅医療とは地域づくりだと実感します」

永源寺地域の取り組みは様々な形で広がり始めている。東京都世田谷区で14年から続く「せたカフェ」もその一つ。世話人代表のノンフィクションライター中澤まゆみさん(68)が花戸さんらへの取材から着想。人と人とのつながりを作るため、医療や子育て、福祉などの情報や知恵を持ち込み、自由に語り合う場だ。「都会でも永源寺のようなつながりを作れる、と実証したい」と話す。(青田貴光)

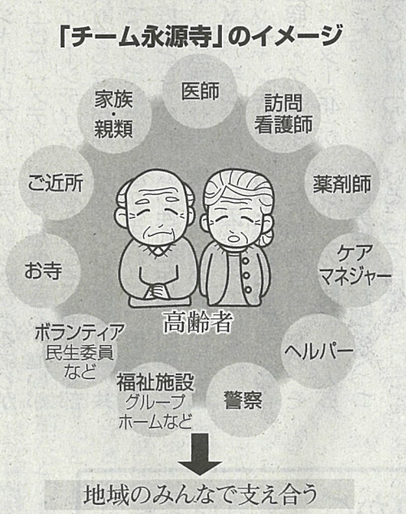
デジタル版に動画

◇

「最期も笑顔で 在宅看取りの医師が伝える幸せな人生のしまい方」は2015年10月～17年8月、朝日新聞滋賀版で続いたコラム「永源寺日記」をまとめた。朝日新聞出版。1400円(税抜き)。



端野マツエさんの家には今もテツの死を知らせる紙が貼ってある



ひととき

長い間考えていた。ご
タルに弱い年寄り2人
スマホは必要か、使い
せるのか。そんな時に
然、携帯電話が壊れた
い切ってスマホに替え
正月帰省の時、お嫁さ
家族間のLINE(ラ
ン)を設定してくれた。

LINEを始めると、
子たちから動画や写真
況報告が次々送られて
ようになった。遠くに
小学生の孫同士は学校
話。息子たちは旨酒の
題。みんなが口をはさ
言葉が飛び交う。

息子3人は転勤族だ。
れぞれ家庭を持ち、各
散らばっている。みん

患者を生きる 3490

妊娠・出産 母子感染④

症状改善 夢は看護師

2009年1月、29週で生まれた神奈川県茅ケ崎市の小学3年生相原未来さん(9)は母知子さん(37)のおなかにいる時に「サイトメガロウイルス」に感染した。抗ウイルス薬による治療で、肝臓の肥大などの症状は改善した。動脈管開存症の手術も受けることができ、無事成功した。

しかし、1歳の時に受けた検査で、両耳の難聴がわかった。この病気で起こる難聴は症状が進むと聞いていたため、知子さんは「このまま耳が聞こえなくなってしまうのでは」と不安になった。

未来さんは1歳3カ月でようやく退院することができた。ただ、在宅での酸素吸入や経管栄養が必要で、週2～3回の訪問看護を受けた。ぜんそくの症状が出て入退院を繰り返した。

「こんな思いをする人を増やしたくない。この病気をもっと知ってほしい」。知子さんは自身の経験をブログで発信するようになった。同じ経験をした母親らと知り合い、患者会にも参加した。

未来さんは補聴器をつけ、2歳になると神奈川県聴覚障害者福祉センター(藤沢市)で週1回のペースで訓練を受けた。手話も覚え、少しずつ言葉を発するようになった。4歳になると、在宅での酸素吸入が必要なくなった。難聴も少しずつ改善し、5歳のころには補聴器を外すことができた。それまでは茅ケ崎市内の児童発達支援施設に通っていたが、小学校は普通学級に通えることになった。言語聴覚士の訓練を受けて発音も少しずつよくなった。

同級生に比べると、未来さんは体は小さく体育の授業で長距離は走れない。それでも少しずつ体力がつき、昨年初めごすこと

「学校遊んだり ん。「人 護師にな んは「い こまで来 に感じて

知子さ の姿は、 で初めて と奇跡に に笑って そう願っ

知子さん(左)と未来さん＝2017年11月、神奈川県茅ケ崎市の自宅